

2022年4月4日

報道各社

## プレスリリース

江戸期後半、兵庫津で活躍した海事の異才・工樂松右衛門の生涯を描いた評伝『近世海事の<sup>イノベーター</sup>革新者 工樂松右衛門伝—公益に尽くした七〇年』が4月5日に富山房インターナショナルより刊行、全国の書店で発売される。いまの兵庫県高砂市の生まれで、15歳頃に兵庫津に出て、亡くなる2年前まで人世の大半を兵庫津に暮らし、そこで北前船のスピードアップに大きく貢献した画期的な帆布を発明した。そして酒田、新潟、秋田からは材木や米を回漕。京都の大火の後には、秋田から運んだ杉材を本願寺に寄進している。

晩年には幕命により択捉島に船着き場を作り、また箱館港の築島、船渠の建設も行うなど、幕府の国防政策上やさらには海路物流に不可欠な港湾インフラを築造、整備して公益に大きく尽くした。その遺産は、現在も宇和島藩奥浦、福山藩鞆、郷里の高砂に残っている。これまで工樂松右衛門の評価が正しく紹介されないで埋もれたままになっており、松右衛門の出自に関しても謎が多かったが、この度神戸学院大学経営学部長である松田裕之教授によって明らかにされた画期的な著作である。北前船ブームの今、大いに注目される。



問い合わせ先:  
松右衛門ファウンデーション  
minfo@matsuemon.net